〒745－0034　周南市御幸通２丁目22
防長本社　Eメール　bocho@chugoku－np.co.jp
中国新聞山口　Eメール　chugoku@c－spice.co.jp
情報サービス　URL　http://www.c－spice.co.jp
☎0834(33)5605　FAX0834(33)5610

ホッと通信

教育・文化

にしゃんたのやまぐち日記 ⑫

僕探しくせで再認識する「己」

〝日本人離れ〟している僕が、知らない人に声をかけられるときの第一声は大抵「どこ？」である。

僕もアホではないので、相手が聞きたがっていることはよく分かっている。でも、少しばかり人間ができていない僕の答えは一定しない。実にばらばらである。質問した相手の表情をチラッと見たり、僕の気分の起伏も大いに関係したりする。

「そこのここは、どこどこですね」とその時点での場所を言ったりすることがあったり、さらに余裕のないときは「ちょっとそこ」とか「近所」とか、後から冷静に考えると少なくとも相手からして頓珍漢な返事をしていることに気づく。

でも最近になって事態が変わってきた。それは、相手がどうのこうのではなく、むしろ僕の側に原因がある。実は帰化をしたのだ。

〝帰って化ける〟という二文字はどう意味か、悩んだ自分が懐かしい。日本に来た十八年目の誕生日に法務局に紋付き袴で日本国籍をもらいに行った。「外国人が日本人になる瞬間を見てやろう」と、教え子がたくさん駆けつけてくれた。でも、誰一人として国籍取得の前と後の僕の変化に気づいた学生はいない。

イラスト・石井彩子

アイデンティティーという英語がある。日本語で言うと「己」なのだろうか。その己を国籍に求めるのがどうも常識のようだ。それはもちろん間違いではない。でも唯一でもないと思う。

近代国家の概念ができて何百年の歴史しかないのに、国の数だって減ったり増えたりしている。こんな新しくて、いいかげん（不安定）な概念に「己」を求めることに勇気がいるのかと思うときがある。

しばらく前に、友人が僕の癖を一つ見つけてくれた。僕はどうも辛いものを口に入れた次の瞬間、無意識に空いている手で頭をぽりぽり掻くそうだ。気をつけてみたら本当である。何でこうなるのか、いろいろ考えて僕なりの結論にたどり着いた。

僕が十七歳まで過ごしたスリランカの食事は比較的辛い内容が多かった。発汗作用があるのできっとたくさんの毛穴が開いていたのだと推測される。それが、最近の僕となると、日本の薄味になれてしまっている。

学生のころすでにグルメを紹介する番組の司会をやっているのだから、自分でも不思議としか言いようがない。いつの間にか日本の薄味が基準になって、味が濃いのと料理人に対して失礼を発していることもある。

薄味では頭の毛穴はその役割を求められない。薄味なものを食べているときに休んでいる毛穴が、辛いものを口の中に入れた瞬間目を覚ます。

そうです。これは、作った覚えもない国の概念より一番しっくりくる僕のアイデンティティーなのです。

（県立大国際文化学部助教授
J・A・T・D・にしゃんた）